

2024（令和6）年8月21日

会員各位

第30回シュタムティッシュ  
特別企画

奈良日独協会  
会長：河野 良文  
担当理事：水野 恵理子

湯川史郎先生（ドイツ・ボン大学）講演会（無料）のご案内

「F. M. トラウトが遺した日本の姿」

処暑とは名ばかりでまだまだ残暑が体に堪えるこの頃ですが、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

さて、奈良日独協会では、第30回シュタムティッシュの特別企画として、ドイツ・ボン大学の湯川史郎先生をお迎えして、F. M. トラウト (Prof. Dr. Friedrich Max Trautz, 1877～1952) に関する講演会（無料）を開催致します。

講演の概要ならびに講師略歴については、3～4頁（湯川先生から届いた原稿）をお読み下さい。

当協会設立の端緒を開いて下さったトラウト先生が90年前の日本にどのようなまなざしを向けておられたのか、貴重な視覚資料の数々を通して学んでみませんか。講演会後には湯川先生を囲んで懇親会（希望者のみ）も行う予定です。ぜひ奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

- 1 日時：2024年9月22日（日）14：30～16：30 <14時受付開始>
- 2 場所：大安寺・獅子吼殿
- 3 演題：「F. M. トラウトが遺した日本の姿」（概要と講師略歴は3～4頁を参照）

講演会への参加を希望される方は、恐れ入りますが、下のいずれかの方法で **お名前と電話番号** をお知らせ下さい。 **9月14日（土）必着** をお願い致します。

<連絡先>・・・①～③のいずれかの方法でお願いします

① メール：eriko.agora@gmail.com （担当理事：水野 恵理子）

② ファックス：0742（61）0473

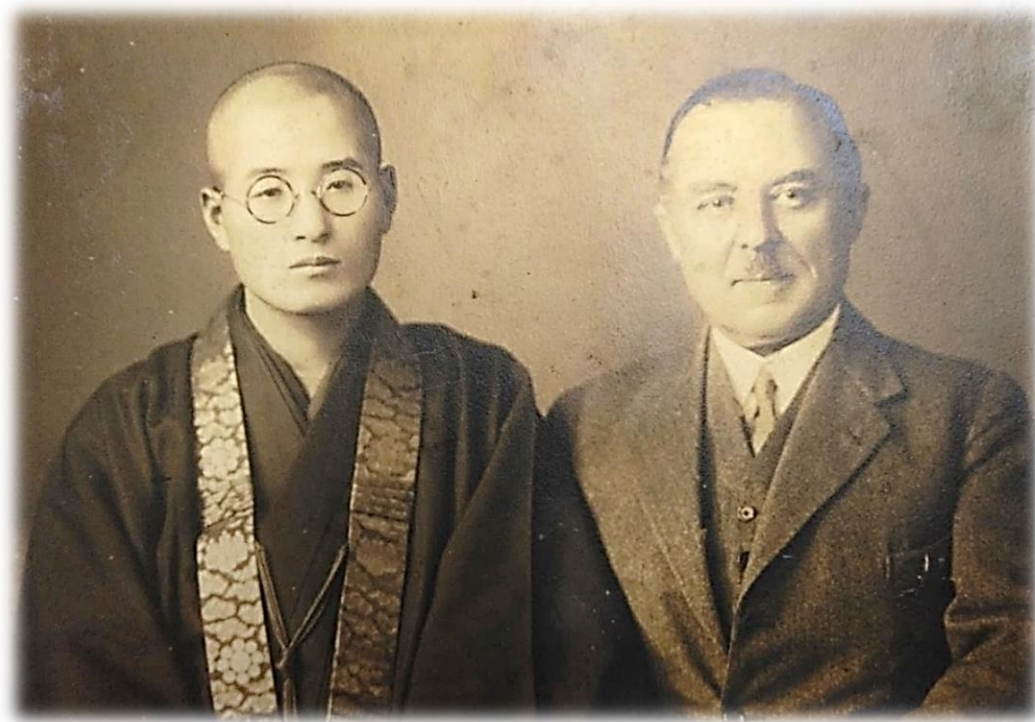
③ 郵便：〒630-8133 奈良市大安寺2-18-1 奈良日独協会事務局

- 4 懇親会（**希望者のみ**） 17：30～19：30 やまと庵・本店（JR奈良駅前）  
会費：5,500円（飲み放題付、当日徴収）

\* 懇親会への参加をご希望の方は、申込みの際に「**懇親会参加希望**」とお書き添え下さい。

\* 奈良交通バス時刻表： 大安寺発 17:12 → JR奈良駅着 17:17（250円）

<奈良日独協会とトラウツ先生 2枚の写真から>



若き日の河野清晃初代会長とトラウツ先生。1931（昭和6）年撮影。

写真提供：河野恵美子・現会長夫人

日独協会は全国各地に 50 ほどありますが、事務局がお寺の中に置かれているのは恐らく奈良だけです。

当協会では、2022（令和4）年11月、トラウツ先生の功績を偲び、高野山日帰りバスツアーを実施しました。先生の墓前で没後70年記念法要を執り行った後、精進料理をいただき、高野山根本大塔を拝観しました。



高野山・奥の院にて。

左端の五輪塔はトラウツ先生が生前に建てさせたもの。上から5番目の方形の石には、左右に「日本」と「独逸」の文字、そのあいだに両者をつなぐ橋の絵が彫られており、日独の架け橋たらんとした先生の願いを表しています。

## 演題：「F. M. トラウトが遺した日本の姿」

湯川 史郎（ドイツ・ボン大学）

### ◆概要

奈良日独協会発足 55 周年の折に出版された『あゆみ — Schritte』（2002 年発行）に記された沿革（55 頁）の最初には次の項目が挙げられている。

- 1931 年 河野清晃氏は高野山大学の卒業論文で「高野山根本大塔の研究」を論述し、フリードリッヒ・マキシミアン[正確には「マックス」]・トラウト(Dr. F. M. Trautz)博士(当時ベルリン大学教授・京都日独文化研究所[正確には「独逸文化研究所」]主事)の目に留まったことが、その後の日独文化交流・親善の第一歩となる
- 同 10 月 博士の薦めで京都日独文化研究所へ入所し、博士と仏教美術特に仏塔の研究に従事
- 1934 年 5 月 『高野山根本大塔の研究』を両氏で日独両語で出版

1956 年に初代会長として奈良日独協会を立ち上げた河野氏が日独交流と取り組みむきかけとなったのは一人のドイツ人との出会であった。大学卒業後間もない若き学僧と 50 代半ばの日本研究者は「仏塔」の研究によって出会い、共に一冊の本を作ることを通じて、互いに敬愛しあう特別な関係を築いていったのである。戦前に結ばれた二人の友情が、戦後になり個人を超え国あるいは文化の間の懸け橋となったのであり、息の長い草の根文化外交ともいえるような歴史の動きを、奈良日独協会は体現しているといえる。

この河野氏が出会ったフリードリッヒ・マックス・トラウト(Friedrich Max Trautz, 1877~1952)とは、陸軍将校、日本研究者、日独交流・研究機関の所長を務めるなど、20 世紀前半の日独関係においてさまざまな役割を果たした人物だった。ドイツ帝国陸軍参謀本部において日本専門家として日露戦争の研究に従事し、第一次世界大戦で中東戦域へ従軍したのち退役。その後、日本研究者としてのキャリアを歩み始める。ベルリン・フリードリッヒ・ヴィルヘルム大学で日本学を主専攻とした博士号を 1921 年に取得、1927 年には教授資格を取得する。ベルリン日本研究所の初代所長(1926~1930)、京都ドイツ文化研究所の初代主事(1934-1938)を務め、戦間期の日独文化交流において重要な地位に就いていた。

またトラウトは生涯を通じ、日本に関する書籍や地図や絵葉書や写真などの資料を蒐集する傍ら、訪日の折には自らカメラを携え、様々な風景や事物、そして人物を写真やフィルムに収めていた。それらの資料は彼の書簡や原稿とともに、現在はドイツにある 5 つのアーカイブに収められている。本講演ではそれらの資料のうち、彼が 1909~1910 年そして 1931~1938 年の二回の日本滞在時に撮影した写真に注目し、彼が遺した日本の姿を紹介する。トラウトにとっての日本、そして日独交流とは何だったのか、彼のまなざしを通して考えてみたい。

## ◆講演者略歴

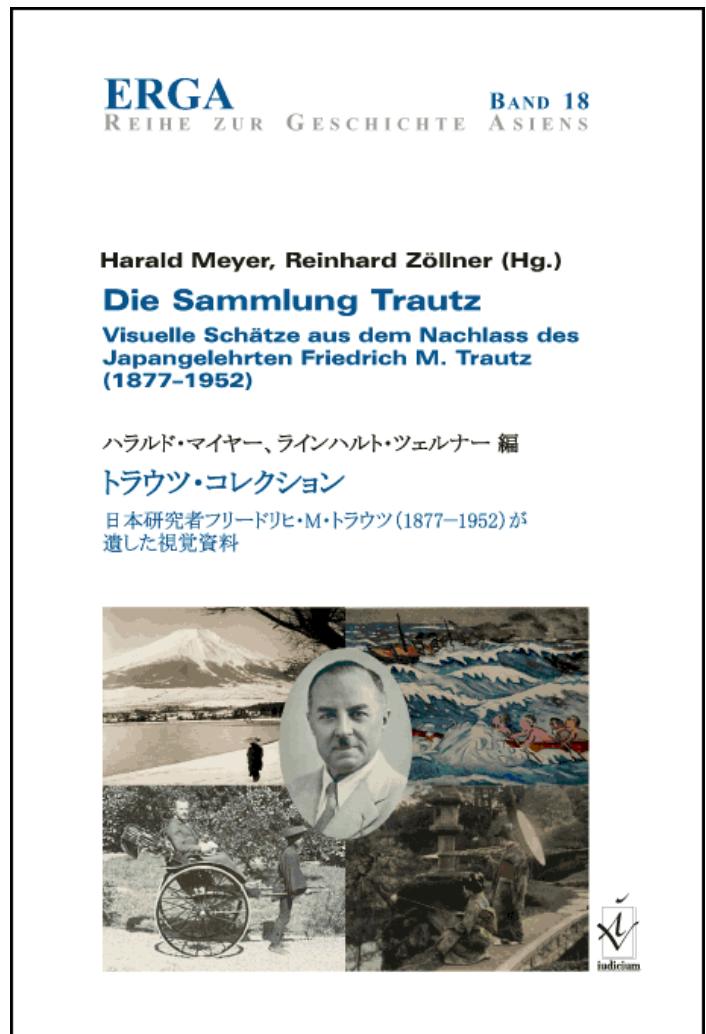
2010年ドイツ・エアフルト大学で博士号取得（メディア・コミュニケーション学／比較文学、東アジア史）。同年ボン大学人文学部アジア研究科日本・韓国研究専攻専任講師。2014年より同専攻学術専任講師。SPレコード4000枚をデジタル化する「片岡プロジェクト」（2018-2022）のコーディネーター及び、オンラインの研究会「片岡コレクション研究会」<sup>1</sup>の運営員並びに事務局担当。2021年10月よりドイツ研究振興協会（DFG）助成プロジェクト「F.M.トラウト（1877-1952）とドイツ帝政期からナチス期までの日独関係」を進める。研究領域は比較メディア史、その理論と方法。ヨーロッパと東アジアの書字・印刷メディアの比較文化史。現在は1930～1940年代のドイツ、日本と満洲におけるメディア産業と社会との関係に集中的に取り組む。また、日本・韓国研究専攻が所蔵する非文字資料（絵葉書、写真、スライド、フィルムなど）のデジタル化による学術資源化プロジェクトも進めている。編著に『Nordostasien in Medien, Politik und Wissenschaft（メディア、政治、学問における北東アジア）』（共編、EB-Verlag社、2019）、『Ostasien im Blick（東アジア展望）』（共編、Ostasien-Verlag社、2021）、『歴史の音』（共編、ボン大学リポジトリ<sup>2</sup>、2022年）、『The Sound of History（歴史の音）』（共編、Iudicium社、2023年）など。

右は、ボン大学人文学部アジア研究科日本・韓国研究専攻の教員が中心となって執筆した論文集：『トラウト・コレクション 日本研究者フリードリヒ・M・トラウト（1877-1952）が遺した視覚資料』（2019年刊）の表紙。

中祢勝美理事からひとこと：

湯川先生は、2024年7月、ボン大学において「学生が選ぶ優秀教員賞2024」（大学全体では14名）を受賞されました。豊かな学識、それを分かりやすく伝える教育学上の創意、熱意などいずれの点でも他の模範になる教員として高く評価されたものです。

<https://www.uni-bonn.de/de/neues/141-2024>



1 <https://www.ioa.uni-bonn.de/japkor/de/forschung/kataoka-sammlung>

2 <https://doi.org/10.48565/bonndoc-19>